学籍番号：204036　名　前：松原 凜　Rin Matsubara
研究室：藪内研究室

Ｒ５年度　長岡造形大学 美術・工芸学科クラフトデザインコース　卒業研究

研究テーマ　「楽しみを与える兜の制作研究」

《制作意図及び概要》

私は実際に着用ができ見ている人、着用している人に楽しみを与えるような兜をこの約1年間制作研究した。

本来、兜は鉄に漆などを塗り強度を高めるが今回の制作研究では「銅」を用いて制作する。私が銅を用いて制作する理由は銅の持つ性質に加え銅だからこそ魅せれる色彩や表現があると思ったからだ。実際、制作を終えると色上げによって形がより引き立ち、今までにはないような兜が制作できた。また、先人たちが築き上げた兜の技法などを摸倣しながらも、現代らしい色彩豊かな兜が完成した。また、実際に触ってもらうと多くの気付きなどが垣間見えた。私にとっては非常に喜ばしいことだ。

また、この兜は実際に来た人、見に来た人に触ってもらい、実際に被ってもらえるようにする。それは私自身が工芸品や作品は、諸事情は別として触ってもらうことによって多くのことが発見、理解でき背景を知れると考えるからだ。ましてや金属を用いた兜を触る機会はほとんどない。このことから、私は兜に触れてみてもらいたいと考え制作研究に至った。

兜を制作するのには理由がある。一つ目は身に着ける楽しさがあると思うからだ。

今日、兜を見る機会は非常に少なくなった。一方、端午の節句などで兜は見ることができるが、それはあくまでも簡略化されたもので軽量素材などを用いて縮小されて製作されていたりする。そこで実物大の兜を用いることによって物珍しさや迫力をきっかけに被ってもらい被った人やその周りが楽しめるような兜を制作したい。

二つ目は展示物としての楽しみがあると思うからだ。兜は見た目ではシンプルな形だが細かく見ると「装飾はどうなっているのか」「どう接合しているのか」など不思議な部分が多い。それを実際に間近で見て、自分の手で触ることによって新しい発見ができ、そこに楽しさが不随してくると考えた。

次に、この兜の前立を見ている人が変えられるようにする。それは見ている人、被ってもらう人にとって一番好きだと思う兜を選んでもらいたいからだ。そもそも、「前立」とは兜の前部につける立物のことで、二股に分かれている鍬形や伊達政宗が着用していた兜の月の形などがそれに該当する。兜は自身を守るためのものではあるが、同時に「私が手柄を取った」ということ周りに分かりやすくするためのものでもあった。このことから、当時は各武将が各々目立つための工夫や戦事へのゲン担ぎなどから多種多様な兜が生まれた。その事柄が全面に出ているのが前立である。その前立を見ている人が付け替え、好みの兜にすることによって鑑賞の楽しさや身に着ける楽しさが生まれると思う。

《作品サイズ》

兜（前立なし）：約横 400 ㎜×奥行 400 ㎜×高さ 300 ㎜
前立：約横 200 ㎜×奥行 5 ㎜×高さ 250 ㎜　他

《前立のデザイン》

・『鍬形』…元々の由来には諸説があるが、鹿の角がモチーフになっている説が有力である。私は、鍬形を研究しつつ自分なりのオリジナルを考え、そこに伝統模様の「麻の葉」を鏨彫りした。麻の葉は昔から成長が早いことから強い生命力を象徴する。また、魔を除ける力があるともいわれる。

・『紅葉』…紅葉は邪気をはらい、魔除けの効果があると昔からモチーフに使われていた。また花言葉は「先見の明」「用心深さ」などあり、前立には良いと思い今回選んだ。従来金属作品は最後に着色を行い完成となるが今回は葉 1 枚 1 枚異なる着色を行いたかったため先に着色をし、紅葉の自然豊かな色彩を表現した。

・『日輪』…シンプルな形だがモチーフは太陽である。武将たちの間でもよく用いられたもので宗教的な信仰から採用された面がある。太陽のきらめきを表現するため真鍮を鏡面まで磨きシンプルながら煌びやかなものにした。

《素材の説明》

銅：本来、兜は防御の面から鉄板を加工し錆止めや漆塗りを行うが今回は銅を用いる。その理由は防御する必要性がなくなったのは勿論だが、一番は銅による着色技法の多様さを活かして過去にはないようなものを制作したいからだ。

真鍮：前立部分に用いる。
これは一番目立つように装飾を行い鏡面仕上げにするのみ

紐：真田紐を用いる。昔から真田紐は茶道や刀を留めるために使用されており、日本らしい色使いと組み方を用いている。今回は紫色の真田紐を用いた。

布：兜の内側に用いる。厚手で金色が施してある唐草文様の布にした。

《着色技法》

そもそも、私が着色に興味を持ったきっかけは初めて硫化をした時の感動から来たものだと考えている。それまでただの銅色のままだったものが硫化をすることによって全く違う作品となり一言では言い表せないような色彩となった。その時私はとても感動を覚えた。また、目指した色になった場合は相乗効果でより美しくなり、反対に思っていた色と違う色になってしまった場合、形の良さまでもマイナスのイメージとなってしまう。私はこの側面も魅力であり弱点でもあると考えている。

今回、銅を素地として用いているので兜の表面処理は銅の着色技法を活かしたものにした。そもそも、金属の色上げ方法は無数とある。その中で今回用いた技法を下記に端的に説明する。

・硫化…温泉などに多く含まれる硫黄の成分によって銅を最終的に黒くする。黒くなるまでに茶、赤、緑、青など様々な色となる。液の温度・濃さなど深く関係する。

・緑青…本来は銅の錆で自然とできるものだが人工的に誘発することもできる。緑青を剝がれにくくするため下地として硫化を行い、酢酸銅、硝酸銅の配合液を数回塗布することによって生じる。

・緋銅…溶ける寸前まで銅を熱し、その状態でホウ砂水溶液に入れることによって鮮明な緋色が出てくる。従来の着色は地の表面に膜のように被さるが緋銅は銅そのものが持つ色を表面にだす着色である。

・錫引き…今回１番用いた技法でもある。メッキ技術を応用した着色技法。本来は銅の成分が溶け出ないようにコップなどの内側に錫を定着させるメッキ技術の一部。
溶けている錫を刷毛などで撫でると達筆な文字のような荒々しさを感じる。今回は錫引きと硫化を両方用いた表現が多い。

〇兜の概要及び補足

そもそも、日本において兜が出現したのは弥生時代。くにの争いが起き身を守るための防御が必要だった。当時は木製だったが、古墳時代になると銅や鉄を用いて防具としての役割を担っていた。一方、祭事や副葬品にも用いられることもしばしばあった。また時代の変化と共に防御に加えて武将達の威厳や個性を表現する役割も担うようになり、江戸時代になると男の子の健やかな成長を願う端午（たんご）の節句に兜を飾る風習ができ、今日でも残っている。しかし、その風習も簡略化・衰退化の一途を辿っていくばかりである。

日本の兜には他国にはない工夫や技法が用いられている。右の写真はどちらも役職の高い人物の甲冑だが、西洋兜は無難なデザインで関節部分などの可動域は部品を大きくし空間を広げてあるだけであり、装飾もあるが目立つほどではない。一方、日本の兜は全体的なデザインから紐までデザインされており装飾性に富んでいる、また関節部分などの可動域は金属板による蛇腹や布を用いることによって可動域を確保している。他にも鉄板を素地のまま用いるのではなくわざわざ漆などの塗料を塗り、色を付けている。

ではなぜ、日本の兜はここまで装飾性に富んでいるのか、それは戦事における手柄の取り方にあると考える。

中世・近世の西洋の場合では、敵を殺さずに捕虜にして人質として、相手側に身代金を要求するのがスタンダードだった。また、集団として扱われるため個人の主張はほとんどいらなかったと考える。一方、日本の戦では相手の首を切り本陣に持っていくことによって手柄となる。またその手柄は殺した個人の手柄となり末永く家に伝えられると共に、褒美などももらえる。戦場では人が入り乱れ、とてもではないが顔などは分からない。そこで活用されたのは兜や鎧であった。

また、その中でも『前立』は武将たちの個性が出ている。特に一般的な「鍬形」は多くの説があり、鹿の角を模しているのではないかという説があるが、どの説も「何故その形なのか」という結論には至っていない。他にも伊達政宗や上杉謙信は進行していた宗教・仏様が元となっていたり、豊臣秀吉、徳川家康などは植物からモチーフを選んだりと多くの由来がある。

出典

山岸素夫、宮崎眞澄・著,『日本甲冑の基礎知識』,雄山閣出版株式会社,1990,360ｐ.
中西立太・著,
『日本甲冑史［下巻］戦国時代から江戸時代』,株式会社大日本絵画,2009,96ｐ.
橋本麻里・著,『変り兜　戦国の COOL DESIGN』,新潮社,2013,125ｐ.